

## 鮎と商人

理事 栗原秀人

「こんなに小さな子供の鮎を食べてしまっているのですか?」「これでも大人です。子ではなく小、小さいから小鮎と呼ばれています。」、鮎といえば小



さくても20センチはあると思いついでいた私の、琵琶湖岸のお土産屋で初めて見た「小鮎の甘露煮」の会話でした。琵琶湖の鮎は海に通わない陸封型で、餌の量が少ないため、せいぜい7、8センチほどにしかありません。餌が少ないから闘争心が強いとも言われています。大正になって、湖産鮎の中でも湖に流入する河川に遡上して餌を沢山食べたものは大きくなって戻ってくるのが分かりました。昭和に入って、エリや追いさで漁など独特の漁法で捕獲された稚鮎が、全国の河川に放流されるようになりましたが、放流先で大きく育った湖産鮎、その闘争心から友釣りに向いているとの人気で、全国での放流量の大半を占めるまでになりました。

「三方よし」とは、売り手よし、買い手よし、世間よしで滋賀出身の近江商人が商売理念としたものです。世間よしとは、地域の繁栄です。

近江の商法は「諸国産物廻し」と言われますが、これは上方で仕入れたものを地方で売り、その地方の特産を仕入れて、他の地方で売り、またそこの特産を買って、を繰り返していくというもので、近江商人は各地方にモノとカネを落としながら、地域に溶け込んだ拠点を築いていきます。近江商人ゆかりの「近江屋」が、今も各地の商店街に老舗として残っているのもこうした由縁です。

山形地方の名物に「おみ漬け」<sup>せいさい</sup>があります。特産の青菜に人参、大根などを加えた漬物ですが、これにも近江商人が関わっ

ています。紅花などの取引に関わっていた近江商人が、農家から貰った野菜に醤油をかけ、お弁当のおかずにしていたものを地域の人が分けてもらい、これは美味いと受け継いだ「近江漬け」が「おみ漬け」になったと言われています。

近江商人が起業に関わり、全国世界に羽ばたいた企業が数多くあります。

「滋賀の人は琵琶湖の鮎と同じだ。外に出たら大きくなって出世する。」と滋賀の人から聞きましたが、さて、なんと応えて良いのやら・・・。



小鮎の甘露煮

## —「荒川・下水道フェスタ 2017」活動報告—

理事 神山真一

### ○概要

埼玉県と埼玉県下水道公社の主催による「荒川・下水道フェスタ2017」が、10月21日(土)に荒川水循環センター(埼玉県戸田市)で開催され、NPO 21世紀水倶楽部(以下、当会)も昨年に引き続きブースを出展した。当日は台風21号が関東地方に接近しあいにくの雨であったが、会場には2,467人が訪れた。当会は「下水道宝物さがし」というテーマで会員7名が来場者への説明を担当した。

### ○展示内容

下水道の中にかくれている宝物(資源・エネルギー)が、

我々の生活や社会に役立っていることを知ってもらうために、「下水道宝物さがし」というクイズを出題し266人に答えてもらった。

クイズは、「下水道の中に A 固形燃料、 B 再生水、 C 下水熱 の宝物がどこにかくれているか?」という問題で、ブース中央に展示した大型パネル（下水道のしくみ）に表示した①、②、③からそれぞれ選び解答用紙に色別シールをはってもらうことにした。

子供達には大型パネルを使用しできるだけ分かりやすく問題の説明をした。大人達も下水道から生まれる様々な資源やエネルギーに興味を示し、活用事例について具体的に質問されるなど熱心に説明を聞きながらクイズに答えてくれた。

ブースには大型パネルの他に、下水汚泥から資源やエネルギーとして肥料、燃料ができることや再生水の利用、下水道施設上部の公園としての活用等について「下水道は宝の山」という2枚のパネルを展示するとともに、埼玉県の宝物として「さいたま新都心再生水利用事業」と「下水汚泥固形燃料化事業」について具体的にパネルで紹介した。

また当会と下水道広報プラットフォーム（GKP）で募集した活性汚泥微生物の「奇跡の一枚大募集」の応募作品の展示も行った。



NPO 21世紀水倶楽部のブース



真剣に問題の説明を聞く子供達

《下水道宝物さがしのクイズ》



下水道の中に、A、B、Cの宝物がかくれているよ？  
**A 固形燃料**  
**B 再生水**  
**C 下水熱**  
 パネルを見て答えを  
**①、②、③ からえらび**  
**シールをはってね**



答えのシールをはって景品をもらおう!!



ブース前の会場の様子

私の下水道論（1）国土の富栄養化をどう捉えるか

佐藤和明

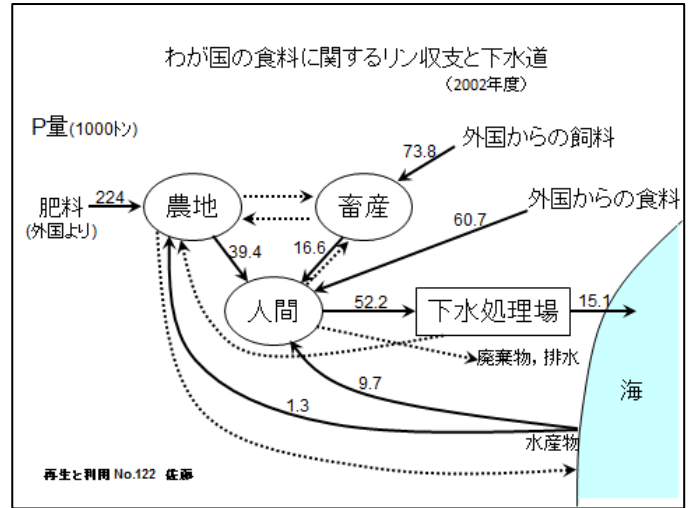
瀬戸内海が貧栄養化！という新聞記事に目を疑った。何故なら、戦後この方私たちの身の周りの自然環境は富栄養の方向をまっしぐらに進んできたと思えないからだ。嘗てのはげ山は鬱蒼とした森の山となった。きれいな砂礫の水辺は、水生植物が繁茂してその様相は変わった。

こうした状況の大きな変化の兆しは、高度経済成長期と言われる昭和30年代後半に起きたと思われる。瀬戸内海は恐らく昔から豊かな海であったが、栄養塩のレベルは現在よりかなり低かったと推察される。これは小林純博士の仕事で示されたように昭和30年当時の日本の河川水質の栄養塩レベルが現在よりずっと低かったことから類推できる。陸地から供給される栄養塩が低レベルであるのにどうして豊かな海が生まれるのであろうか。それはまさに閉鎖性で水深が大きいという特性により、一度負荷された栄養塩がプランクトンとなり沈降し、それが底質を介してまた循環することにより、幾度も生物生産に寄与することによると考えられる。

米国東海岸のチェザピーク湾での取り組みを参考にして言うならば、瀬戸内海では十分な透明度を確保して海藻の生育条件を整え、底質も良好な状況とすることにより、多様な海産資源を求めるところを基本とすべきと思う。ノリ産業ということのみに目を奪われ、場にそぐわない栄養レベルの追求をし、海の透明度を犠牲にすることはあってはならない。瀬戸内海では、きれいな海をベースとした豊かな海の追求が基本だ。

現在わが国には肥料や食料輸入に伴って窒素、リンが多量に国土に集積している。この状況と下水道の関係を図に整理してみた。生産、輸入される食料中のリン量の40%強が、下水道に集約されていることがわかる。栄養塩の問題を解決するために、下水道の役割は大きい。肥料や畜産廃棄物に係る栄養塩負荷量は確かに大きいですが、確実な対策という点からは、下水道システムの能力は高い。

当水倶楽部の研究集会「閉鎖性海域と下水高度処理—どこまでやるのか！」 (<http://www.2lwater.jp/k1/2007au/>) は以上の議論の端緒であった。今再びこれを問われれば、できるだけ下水高度処理を進めることが肝要と答えたい。それには高度処理の電力消費、リン・窒素リサイクルの課題、そして窒素処理と地球環境問題についてなお説明が求められるだろう。次回以降これらの問題を順次考察していきたい。



以上は「たより」への概要です。

全文はHP論文図書館の「私の下水道論」をご覧ください。

編集幹事のあと整理

- 巻頭文は栗原理事の近江の国の話。栗原氏は一時、滋賀県に勤務されたので、その時の回顧でもあります。
- 神山理事からは毎年の恒例となった荒川・下水道フェスタへの当会の活動報告です。台風上陸前日、大変だったでしょうね。
- 会員だより、理事長の佐藤和明会員から投稿いただきました。シリーズ二回目ですが、この実質初弾は「富栄養化」の論です。従来からの「富栄養化対策しすぎ」への対論となっています。
- 佐藤氏の「私の下水道論」全文は論文図書館へ順次掲載しています。現在は第1章「国土の富栄養化をどう捉えるか」
- 会員だよりコーナーへの投稿を募集しています。投稿はいつでも受け付けます。直近の号に掲載します。投稿要領などは望月から毎回お出ししている原稿依頼メールをご覧ください。

編集幹事・望月